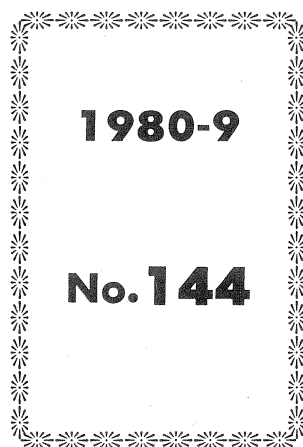
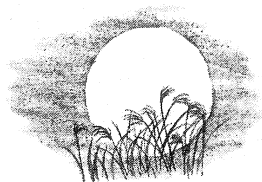


文化庁月報



【表紙】

静物

——パレット・燭台・ミノトールの頭部
(部分)

パブロ・ピカソ画

解説は30ページ

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

職人と芸術家……………犬丸 直 4

演劇のスタイル

——舞台と観客の変容——……………水落 潔 7

第10回カルコン報告……………倉田文作 9

アメリカ巡回

「円山四条派絵画展」終わる……………佐々木丞平 12

〔随想〕

若羌という集落

——西域南道の旅——……………井上 靖 16

文化庁ニュース

全国・ブロック別民俗芸能大会について……………18

国宝・東福寺三門の模型完成……………19

「絵画のアール・ヌーボー

——ヨーロッパと日本」展……………19

〈新設法人紹介〉

財団法人劇団すぎのこ……………20

社団法人東光会……………21

文化庁企画・提供「美をもとめて」10月の放送予定…21

祭礼歳時記シリーズ ⑥

10月の祭り……………榎本由喜雄 22

我が県の文化行政

個性豊かな県民文化の振興を目指して

——愛媛県の文化行政——……………井上平加寿 24

海外文化行政事情シリーズ ③〔CDI報告書から〕

博物館局とスミソニアン機構……………松野 精 27

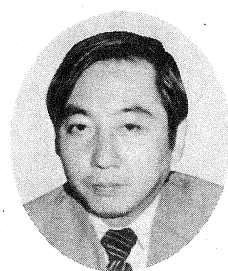
著作権シリーズ(16)

著作権の制限——営利を目的としない上演等——…29

国立劇場ニュース……………31

演劇のスタイル

舞台と観客の変容



みず
おち
水落 潔
きよし

(演劇評論家)



ことし七月、日生劇場と芸術座で、チエーフの「かもめ」が競演され、演劇界の話題になった。歌舞伎で同一狂言の競演というのは、ないではなかったが、翻訳劇のこうした競演は珍しい。しかも、芸術座は東宝の制作で、チエーフが、いわゆる商業演劇の舞台に登場したわけである。こうしたことも、十年前には考えられなかった。演劇界は、他の芸能ジャンルに比べると、動きが少ないように思われ、事実そうなのであるが、そういいながらも実際には、日に日に動いている。それも新しさと古さが、混然となつて動いているところに、演劇の世界の特色があるといえようか。

早い話、「かもめ」という作品は、築地小劇場以来の新劇のレパートリーである。その点でいえば、古い作品といえるだろう。しかし、今回の両劇場の演出家は、ともに、新しい「かもめ」を創造すると意気込んでいた。メランコリックな、古典的なチエーフでなく、現代に生きるチエーフを創り出すのだという。となれば、「かもめ」という戯曲は古典でも、舞台は新しいということになる。

出演者にしてもそうだ。日生劇場は劇団四季のユニット出演だから、とくにいうことはないが、芸術座のほうは、さまざまなジャンルから俳優をピックアップしている。ニーナの栗原小巻は俳優座だし、トレープレフの近藤正臣はテレビ出身、そのほか、宝塚出の上月晃・淀かおる、文学座出身の細川俊之、それに東宝現代劇の青木玲子・佐藤富造らがいる。昔風というなら混成軍である。

こうしたキャストによって、チエーフを上演しようという発想は、十年前にはあり得ないことであった。

しかし、今日、それが不思議なことではなくなった。時代が、そうしたことを許容するようになったのである。

演目の選び方、舞台のつくり方の変化と同様、観客のほうも目にみえないが変容してきている。この芸術座の「かもめ」を観た人は、決してチエーフの愛読者でもなければ、新劇ファンでもない、中にはそうした人もいただろうが、大多数は、大衆劇の観客であった。これに先だつ六月には、同じ劇場で、テレビドラマを劇化した

橋田寿賀子の「夫婦」を観ていた（あるいは同質の）客であった。

かつてのように、新劇の客、歌舞伎の客、大衆劇の客という客層の垣根はなくなつてしまった。演目から俳優、観客に至るまでの従来の垣根をとり払ってしまったのは、テレビである。テレビの時代になって、各ジャンルの俳優が入りまじつて芝居をするようになり、それがまた、茶の間という日常の生活の中に飛びこんできて、芝居のありようというのは大きく変質した。俳優はジャンルの如何にかかわらず、テレビに出る時はタレントと呼ばれ、タレントとしての演技を求められるようになった。

その演技とは、日常性に根ざした、リアルな演技である。ふだんあるがままに、自然にふるまうことが、茶の間という日常生活にとけこむために、最も有効なスタイルとなった。テレビでは、演技技術より、素顔の魅力が優先するというのは、そのところである。

歌舞伎俳優が、ホームドラマの父親役を演じて成功し、新劇女優がその妻になつて自然に見える。その両親の子に流行歌手が起用される。こうしたケースは、三人が日常性という素顔を接点として、ドラマをつくっていくから成立する。こうして、テレビというメディアは、そのメディアとしての強さと広がりを生かして、芸能界の中の垣根を、次々に荒々しく破壊していった。ジャンルをこえた俳優の共演は、このようにして、まずテレビで実現したが、やがて、それは舞台に還流してくるようになった。

当初は、テレビの人気者が舞台に出るという「実演」の形でスタートしたが、やがては舞台そのもののために、各ジャンルの俳優が集まると

いう形になり、今では、それが、ごく普通の公演のスタイルになっている。

かつて、松本幸四郎が、森雅之・新珠三千代を語らって「オセロウ」を上演した時、それは演劇界の一つの実験といわれた。しかし、数年前、平幹二朗が、坂東玉三郎と「マクベス」を演じた時、それは実験とは呼ばれなかった。一つの興行であった。

この十余年の間に、各芸能ジャンルの間にあった溝は、恐ろしいほど縮まったのである。俳優が器用になったというべきか、芸質が均質化したというべきか、あるいは歌舞伎とか新劇とかというジャンル別の世界、それを支えてきた生活が変質し、共通化したというべきか、恐らく、そのすべてが、少しずつ当たっていると思う。

その結果、これは歌舞伎、これは新劇という演目の垣根まであやしくなり、新しい座組、新しい制作体制での芝居が産まれてくることになった。

冒頭に書いた芸術座の「かもめ」などは、その一例である。昨年、話題になった帝劇の「近松心中物語」なども、同じような例であろう。平幹二朗、太地喜和子、菅野忠彦、市原悦子ら新劇畑の俳優による、近松物(創作劇とはいえない)の上演というのも、少し前までは考えられないことであった。こうした交流が、すべての面でプラスをもたらしたかという点、そうばかりとはいえない。

人気だけのテレビタレントを一座に加えたために、芝居そのものがぶちこわしになった公演も少なくはない。あるいは、ごく低い次元で演技の質を統一するため、まとまりはあるが感動のない舞台も数多い。

しかし一方で、違ったジャンルの人同士の共演が、舞台に一つの緊張をもたらし、従来の芝居にはなかった効果をあげることもある。

昨年、芸術祭大賞をとった「おもろい女」などは、その好例であった。これは女漫才師初代のミス・ワカナの一代記で、森光子がワカナ、芦屋雁之助が相棒の玉松一郎を演じ、みごとな成果をおさめた公演であった。主演の二人は、この公演の演技で演劇部門の芸術祭大賞を受けたのだが、その二人を育てる秋田実の役に民芸の米倉斉加年が出ていたことが、舞台をうんとおもしろくしていた。初演の時は別の俳優だったが、米倉になって、舞台上活気が生まれた。米倉の新劇で覚えた演技が、森光子や雁之助の



「おもろい女」(森光子・芦屋雁之助、昭和54年度芸術祭大賞)



歌舞伎「米百俵」(昭和54年度芸術祭優秀賞)

ながった。

こうした例は、俳優交流に限らない。昨年芸術祭優秀賞をうけた歌舞伎座の「米百俵」は、山本有三の戯曲で、歌舞伎俳優を頭において書かれたものではない。初演は井上正夫だった。

それを福田恆存演出で、松本幸四郎、中村富十郎らの歌舞伎勢が上演したのだが、この人たちの台詞術が、この硬質の戯曲の表現に生かされ、アンサンブルのとれた舞台をつくり出した。歌舞伎の新しい可能性を示唆したのである。新しければ何でもよい、逆に古ければありがたい、といったものではない。世の動きにつれ舞台も観客も変化していく。その変化の中で何を採り、何をしりぞけるかが大切であろう。芸術祭が、そうしたことの一助となっていけばいいと考えている。

演技と渡りあうことで、これまでの大衆劇にはみられなかった緊張感を生み出したのである。三年前に芸術祭大賞をうけた「愛染め高尾」も、山田五十鈴と江守徹という畑違いの俳優の共演が、新鮮さにつ

国立劇場 ニュース

■新派公演 (大劇場)

歌行燈

風流深川唄

十月四日～二十六日

●かいせつ

歌行燈 明治四十三年発表の泉鏡花の名作を久保田万太郎が脚色。名脚色の誉れが高い。芸術至上主義と神秘主義が、高い格調のもとに融和した作品。

——明治の末の伊勢古市、能楽師恩地喜多八は土地の按摩、宗山の謡を完膚なきまでに侮辱を与える。口惜しさの余り狂い死んだ宗山は一人娘のお袖



「歌行燈」(昭和50年1月)

を残す。この一件により宗家源三郎から勘当された喜多八は、博多節の門附に身を落としていた。桑名の湊屋では源三郎と小鼓の名手辺見雪叟が、何もできないと思われた芸者お三重が「海女」を舞い始めるに及んで、息をのむ。

喜多八の手である。源三郎は謡を、雪叟は小鼓を調べる。かすかにその声と音を耳にした喜多八は、耐えきれず湊屋の門口に駆け寄った。知らず知らずその謡に唱和する。源三郎は喜多八の精進を誉め、お三重、実はお袖と夫婦になることを許す。喜多八に安井昌二、お三重に波乃久里子が扮する。

風流深川唄 江戸の香りを残す下町の義理と人情を描かせては無類の川口松太郎の代表的な作品。昭和十一年十月の初演以来、幾度も上演されて、新派名作の一つとしても定着している。

——下町深川の料理屋深川亭の娘おせつと、板前の長蔵は誰もが認める仲であった。幸せな結婚も間近と思われていたある日、人の良い当主利三郎は、以前世話になった人の借金の裏書のために深川亭を売るか、娘をかねて欲しがっていた保栄堂の娘にして金を作るかの瀬戸際に追いつめられた。長蔵は、母お常の説得によって深川亭を残すべく身を引こうと決心するが、その心中を察し切れないおせつは死んだ気で嫁

入りを決意する。やがて嫁ぐ日、嫁入りの行列が深川亭を出る。とその時、

長蔵が突然現れ、おせつの乗った車を曳いて利三郎のめかけの文字力の家へ引き入れた。江戸っ子気性の文字力は、追っ手にやってきた伊勢春を持ち前のタンカで追い返すと、二人に祝言の盃を交わさせる。それから幾月を経たある山の手の路地裏に、深川亭の暖簾が下がっている。そこには長蔵とおせつの姿があった。奇しくも深川八幡宮様の御祭礼の日であった。水谷良重のおせつ、菅原謙次の長蔵は共に初役。花柳章太郎、水谷八重子のコンビが、川口松太郎と組んで練りあげた新派古典の情趣を心ゆくまでお楽しみいただきたい。

■日本音楽の流れ (小劇場)

旋律をめぐって

十月八日・九日

■雅楽 (大劇場)

舞楽法会——曼荼羅供養

十月三十日

■演芸 (演芸場)

秋の落語名人会

十月九日

現代落語七人会

十月十日

定席・中席

十月十一日～二十日

花形新人演芸会

十月二十一日

編集後記

○読書の秋である。冷夏と言われたこの夏は、本の売れ行きが伸び、空調設備の整った図書館でも空席が目立ったという。秋はまた芸術の季節でもある。今年も全国各地で多彩な文化行事が繰り広げられることであろう。

○シルクロードという言葉は、我々に未知の世界への果てない好奇心とロマンを感じさせる。西域ブームはますます盛んであるが、数回にわたり中国各地を訪問した井上靖先生に紀行の感想を綴っていただいた。

○前号に引き続き文部省の調査報告書から。生涯教育の観点から地域住民がどのような学習活動に参加しているかをみると、音楽・美術・絵画・写真・書道に関する学習、茶・華道に関する学習、舞踊・演劇・民俗芸能に関する学習など、文化活動への参加率が高く、またこれらの学習活動に参加したいという住民ニーズが極めて高いと報告されている。(〇)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 ぎょうせい 営業課
TEL(〇三)二六八二一四一(代表)

「文化庁月報」九月号

(通巻第一四四号)
昭和55年9月25日印刷・発行

編集文化庁

〒100東京都千代田区霞が関3丁目2番2号
発行所 株式会社 ぎょうせい

本社 〒104東京都中央区銀座7丁目4番12号
営業所 〒162東京都新宿区西五軒町52番地
電話(〇三)二六八二一四一(代表)
振替口座 東京 九一六一番
印刷所 (株)行政学会印刷所

定価 一八〇円(送料二九円)
年間購読料 二、一六〇円(送料共)